

---

# キンモクセイ

真澄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キンモクセイ

### 【Nコード】

N9775S

### 【作者名】

真澄

### 【あらすじ】

15年前、国王一家が失踪した。あのときから行方不明のままの姫との再会を待ちながら、ジェイは大学生になっていた。姫と幼なじみだったことを誰にも言えないまま友人にも、好きな人にも。

## 序章

15年前までこの国には王がいた。

人々はまだ、国王一家が不在となった経緯を語ることができない。  
15年は、心の整理をつけるにはあまりにも短くて。

けれどあの頃子どもだった自分にとっては「もう15年」だ。

あんなにいつも一緒にいた彼女の顔だって、今は写真の中のそれしか思い出せない。

私の顔を覚えていて、と言った彼女。

五歳まで一緒に育った彼女。

このまま忘れてしまうのだろうか？

今は行方の知れない、

この国の姫だった彼女のことを。

|| || || || || || ||

数日前から宮殿内は様子がおかしかった。まだ五歳だったから何が起きたのかはわからなかったけれど、その異様な空気は感じ取っていた。

人が、どんどん消えて行く。いつも遊んでくれていた兄さんまで、とうとう出て行ってしまった。

今日は外に出るなど言われていたのを、隠れてそつと抜け出す。使用人の宿舎から宮殿に向かい、少し歩くと、

「ジエー！ジエー！」

いつもとは違う泣きそうな声で、彼女が息をきらせて走ってきた。

「…はあ…これ…これ、もってて」

渡されたのは写真。

「わたしの写真をもやしているの」

「どうして」

「わたしのかお、変えちゃうの。名前も、変えちゃうの」

「リリーがいなくなっちゃうの？」

「だから、これ、ジエーがもってて」

リリーとジエーが二人で写っている写真。澄まし顔が気に入らないと言っていたのに、咄嗟に持ち出せたのがそれだなんて。

「わたしのかお、ジエーはおぼえていてね」

じゅうぶんには理解しきれないままに、ただただうなづく。

「おぼえてる。わすれないよ。かおが変わっちゃってもリリーのこ  
とわかるよ。ちゃんとリリーって呼ぶよ。やくそく……」

小指を差し出そうとしたとき、姫、と呼ぶ大人の声が近づいた。リ  
リーが小声でせかす。

「はやくかくして！」

「姫、写真を持ち出しませんでしたか？」

「…ごめんなさい。これをジェーに渡そうとしたの」

カモフラージュ用に持ち出したもう一枚の写真を侍女に渡すときには、もう大人に見せる顔になっていた。大人の前では決して泣かないリリー。

だから最後に見た顔は、いつものわがままな彼女ではなく、「姫」の笑顔だった。

指切りは間に合わなかった。写真を隠していたから、手をふることもできなかった。

侍女に連れられて彼女が宮殿へ帰っていく。

ただ、キンモクセイの甘い香りだけがその場に残った。

「元々はさ、国民に慕われた王室だったんだよ」

15年前までこの国には王がいた。

王宮殿は主を失ったあと、建物をそのまま生かして大学の校舎とし、各国から学生を受け入れていた。国名から取ったライグヒト大学は、留学生のほが多いのが特徴で、この国の出身者は学生の一割程度しかない。

今までタブーに近かった、ライグヒト王一家の失踪について研究する会 通称「王研」が、変わり者の集まりとして黙殺されているのも、「自由」という校是だけでなく、その国籍比によるところが大きい。事実、ライグヒト出身者はまるで寄りつかないのだ。

「けど、まわりの国からしたら王制そのものが異質だね」

コーヒーを片手に説明するのは、この「変わり者集団」を集めた首謀者・ヨウ。一年前、入学してすぐに「ライグヒト王について語り合いたい人募集」と声を上げた、自称・王制マニアだ。

「じゃあ王制廃止は外圧だったってこと？」

返すのは、ユリ。この大学に来るまで王のいわくをまったく知らなかったくせに、こうして王研に入り浸っている。それはそれで変わり者だ。ここにいるのは皆、マニアックにライグヒト王家について語るような奴ばかりなのだ。

「外圧っていうと大げさだろうけど、発端はやっぱり外からの影響だったんじゃないかな。国民の王室支持率は高かったようだから、国内から不満が出たとは考えにくい」

二人の会話を聞くとはなしに聞いている。

「支持率って、情報操作されてたりとかじゃなくて？」

ユリのその言葉に、つい反論したくなる。いや、余計なことはいうまい。けど。

「それはなさそうだな。国民からは本当に慕われていたみたいだし。まあもつとも」

「愛されてたよ」

つい、言ってしまった。

「ジェイ」



ヨウがこちらをふり返るのを視界の端に捉えながら、ジェイはユリに向けて言葉を継ぐ。

「国民はみんな、王を愛していたよ」

「…今も？」

ユリの言葉には答えず、曖昧な笑みを浮かべただけで、ジェイは部屋を出ていった。

その背中と、それを見送るユリの泣きそうな顔を見て、こらえきれないといった様子でヨウが吹き出す。

「ほんつとお前は懲りないなあ」

「…またやつちゃった…」

「そら、さつき俺が言いかけたことさ。ライグヒトの人たちは王について決して自分の意見を言わない。ジェイもそうだろ」

そう。ライグヒト人のくせに「タブー」の王研に入っておきながら、何も語らない。一般論や客観的な事実は提供しても、自らの感想は決して述べない。一番の変わり者、それがジェイなのだ。

「まあ何かあるんだろうさ。俺たちにはわからない、この国の人が負っている何かさ」

だからあんまりジェイを困らせてやるなよ。ヨウはそう言って、冷めかけたコーヒーを口に運ぶ。

でも、と、ユリは思う。その「何か」を知ることができたら、ジェイをジェイの負っているものから解放してあげられるような気がして。ときどきあんな風に、ジェイの嫌がることを聞いてはそのテリトリーに踏み込んでしまうのだ。

「ジェイは王の何が知りたくてここに来るのかしら」

「あいつが固執してんのは姫のほうだと思っぜ」

パソコンから顔を上げ、そう口をはさんだのは、王研の4人目・口ブだ。失踪マニア　なぜ失踪したか、ではなく「どうやって」失踪したかを明かしたい、というユリからすればいちばん得体が知れない男。

「姫？　リリー姫、だっけ」

「そ。本人が何か言ったわけじゃないけどさ、あいつ行方不明の姫をなんとかして見つけてあげたいと思ってんじゃないのかな。俺の

失踪方法論も真面目に聞いてくれるし」

「ふーん」

なんとなく面白くない顔になる。

「ジョンソン教授の研究室にいるのもそのためだろ」

「？」

ジェイは薬学部 of 学生だ。それと何の関係があるのだろうか？ 聞こえなかったユリをヨウが小突く。

「なに、お姫さまに嫉妬してんの？」

「し…しないよっ」

「まああれだな、ジェイが王研にいる目的なんて、王の消息よりも深い謎だったことさ」

だね、と苦笑を返し、ユリも講義に向かうべく席を立った。

|| || || || || || || ||

王研のたまり場を出たジェイは、そのまま学生寮へ足を向けていた。学生寮は大学本館から歩いて10分程のところにある。その建物はかつて、王宮殿に住み込みで勤めていた使用人の宿舎だったものだ。

この国の人は、王について何も語らない　　そう言われるけれど。

語らないのではない。語れないのだ。

ライグヒトは元々大きな戦乱も内紛も経験したことのない国だった。国民も、本能的に争いを避ける傾向にある。それが15年前の民主化のときは、推進派と王制擁護派とでかなりギスギスしたという。

ぶつかり合うことを知らない民は表立って言い争うことをせず、水面下で疑い合い、互いに不信感を募らせていった。

武力こそ使われなかったものの、誰が敵か味方かわからない。神経をすり減らす日々が疑心暗鬼を生んでいく。

あんな思いをもつくり返したくない　と、人々は暗黙のうちに、王の失踪について口を閉ざすようになった。それを何者かの力が働いた「事件」と呼ぶか、自らの意志による「逃亡」と呼ぶか。それすら口にすることができずに来たのだ。

そうして大人が口を閉ざせば、子どもたちには知る由がない。知らないことは、感想を求められても答えられない。だからライグヒトの人々は、王について聞かれても柔和な笑みでかわすしかできないのだ。

自分だって、ヨウから教えられて初めて知ることが多いのだ。自分の国の王のことなのに。

ましてやあるとき　　自分はあるとき、あの場にいたのに。

本館から寮へ向かう道の途中、甘い匂いが鼻を突いて、ジェイはそちらの脇道にそれた。

この花が香る季節が今年も来た　　。

オレンジ色の小さな花。庭師だった父。厨房係だった母。散った花びらを掃いて集めるのは自分の役目だった。

今暮らしている学生寮に五歳まで住んでいたことは、誰にも話せていない。この国では、王室との関わりは隠すものだったから。

ヨウたちには明かしてもよいはずなのに、自分の気持ちがあまく整理できていなくて。

「ライグヒト人だから王のことを語れない」以上の何かを隠していることを、ヨウたちは気づきながらも放っておいてくれている。それに甘えて、自分と王家との関わりを言えずにいるままだ。だから時々ユリが、さっきみたいに深く斬り込んでくると、戸惑ってしまふ。知ってほしくもあり、知られたくなくもあり。

今まで誰にも触らせずにきた、そしてまた周囲の誰も触ってこようとしなかった部分に、ためらいがちに手を伸ばそうとしてくるユリ。その手をとくとき掴んでしまいたくなる。

…ああ。キンモクセイが香る。

キンモクセイの甘い香りをかぐと、彼女の声がよみがえる。

ジェー、と、語尾を伸ばした発音で自分を呼ぶ声。

国王夫妻の一人娘として愛され、宮殿の太陽だった姫。少しわがままで、勉強を抜け出しては、いつもジェー、ジェー、とジャマしにきた。最後に彼女と会ったのもこの場所だった。

「リリー…」

今どこにいる？ 何を見て、何を感じている？

きみに言いたいことがあるんだよ。

「ジエー！ジエー！」

またか、とジエイはいささかうんざりした顔で、こちらへ駆けてくるリリーを見やった。

「ジエー！なにしてるの？」

満面の笑みを浮かべ、息を切らせてまわりついてくる。まだ五歳ではあったけれど、将来の王位継承者として、ほかの子どもよりも厳しい教育を受けていたリリー。だけれどリリーはいつも、家庭教師の目を盗んではジエイのところへ走ってきた。宮殿内にほかに子どもがいなかったこともあって、いつもまわりついてきたのを覚えていた。そしてそれは、いつもジエイを困らせていた。

リリーに言われるがままに匿えば教師に怒られる。リリーを無視すれば、優しくしてさしあげなさいと親に叱られる。リリーのわがままのせいでジエイはいつも理不尽な思いをしていたのだ。

「またメグ先生の授業を抜け出してきたのかよ」

「…ちがうもん！ 今日はおかあさまと一緒にだもん」

見ると、少し遅れて王妃が歩いて来ていた。公務で不在がちの王妃に会えるのはめずらしい。

「あら、リリーはいつもお勉強を抜け出しているの？」

王妃に笑いながら問われ、そうだとも言えないリリーはジエイを恨めしく見やると、

「おにいさん！お花をおしえてー！」

と、その後ろで剪定作業の手伝いをしていた青年のほうへ走っていた。

リリーのやつ、また兄さんに甘えて……。姫様、と優しく微笑み、王妃に礼をとるのは、庭師見習いのフレッドだ。去年、高校を卒業してすぐジエイの父親のもとへ弟子入りしてきたときは、兄ができたようだとジエイもリリーも大喜びをした。ジエイとリリーにとって、お互い以外でいちばん年が近いのが彼だったのだ。

だからってリリーはいつも、大人に叱られたときはフレッド兄さんの胸に逃げ込むんだ。自分もまたフレッドに甘えていることは棚に上げ、兄を取られたような気持ちでリリーを見やる。

「ジエイ」

王妃に呼ばれて、ジエイはリリーから視線を外し、向き直った。

「いつもリリーと仲良くしてくれてありがとうね」

リリーと同年のジエイを、国王夫妻はかわいがってくれていた。公務で留守にすることが多く、とくに王様にはあまり会ったことがなかったけれど、王妃様はこうして時々頬をなでてくれた。優しい王妃様のことは好きだった。

ジエイ、と優しく呼びかける声は、もう思い出せないけれど。



〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

翌日。

学生寮の部屋を出ると、ユリと鉢合わせた。ジェイが入学して半年後に、ユリの国では春に高校を卒業するためだ、隣の部屋に入ってきたのがユリなのだ。

「あ…」

決まり悪げに昨日の発言を謝ろうとするのを遮るように、ジェイはぼん、とユリの頭の手をおいた。気にすんな、というように。何も言えない自分が悪いのだから。

しかしジェイにとっては贖罪の意味を込めていたそれだが、ユリにとっては「拒絶」だった。

また、だ。ジェイは怒ってさえくれない。

この国に来てからユリが気づいたことは、ライグヒト人は常に柔和な笑みを浮かべているということ。それはつまり、他人に感情を見せないためだ。

…遠いなあ。ジェイが、遠い。

そんなさみしさを隠し、当たり前障りのない会話を交わしながら大学の近くまでやってくると、ユリの携帯電話が震えた。メールの内容を確認する。

「…あ、わたし1限休講だつて」

「残念。あと30分早くわかってたら寝てられたのにな」

「おつ、ちょうどいいところにいた！二人とも時間ある？」

見てほしいもんがあるんだ、とロブが小走りで寄ってきた。

「わたしは今できたところ。ジェイは授業だよ」

時間が空いたら必ずたまり場に行く、とジェイに約束をさせ、ユリを連れていったロブが、たまり場でパソコンの画面に映して見せたのは、女性の写真だった。見たことあるような、ないような。なんとなく不自然な。

「これ、合成？」

「そ。リリー姫の現在の想像図」

どうということ？とユリが聞く。

「リリーの写真は公には一枚も残ってないだろ？だから国王夫妻の写真を取り込んで合成して、ハタチくらいにしてみたんだ」

「足して2で割るってやつ…？」

いや、とロブが続ける。

「王妃に似た金髪、つっ―新聞記事があるから王妃似と想定して、7対3で王妃の要素を多めにした」

「ふーん…でもそんなの作ってどうすんの？」

「こんどの会誌に載せんだよ」

そういえば、秋には一周年記念誌を作るのだと以前ヨウが言っていた。

そこへ、お、できたのか、とヨウがやって来た。

…ほんとにこの人たちは。いつ来てもこの部屋にいるけど、授業出でんのかしら。ヨウはソツなくこなしそうだけど、ロブは四年じゃ卒業できなさそうだな。

そんなことをユリが思っている間に、先ほどと同じ説明を受けたヨウは、あっさりと言った。

「リリーは国王似だよ」

え、マジで！？とロブが声を上げる。

「髪の色は確かに王妃と同じだけど、顔立ちは国王によく似ているって、何歳だかの誕生日の記事に書いてなかったかな」

抜かった、やり直した、とパソコンに向かうロブに呆れていると、ヨウは驚くことを言った。

「ユリは監修やってね」

会誌の、と、さらりと言う。

「えっ！？　なんでわたしが？　なんにも知らないのに」

だからだよ、とヨウはコーヒーを淹れながら説明する。

「マニアが集まって作るとどうしても独りよがりになるからね。ちゃんと一般の人にも読んでもらえるものにしたいわけ」

だからユリがチェックしてよ、というヨウの言い分はわからなくもない。

「…じゃあさっそく一般人の感想を言わせてもらっけど。それはちょっと大丈夫かなって思う」

と、ユリはパソコンの画面をちょいちょいと指差す。

「だってさ、もしかしたら本人が目にするかもしれない可能性はゼロではないでしょ？　身を隠してるわけだから、自分の顔が勝手に載るのはいい気持ちしないんじゃないかなあ」

そんな可能性なんて考えもしなかった、とロブがううむと唸り、ヨウは、やはりユリを勧誘してよかったと、ニヤリと笑う。

「失踪当時の五歳のときの顔ならまだいいかもしれないけど」

「なるほどね。それなら、こんな小さい子が関係してるんだってことで関心をひくかもしれない。どうだ？　ロブ。こないだ作ってた

る」

「じゃあ発表用にはあっちの五歳の想像図のほうにするか」

現在の図も作ることは作るんだ… やっぱりロボの興味ってわからない。ますます呆れるユリに、でもな、とロボが語り出した。

「たぶん、今のリリーはこの顔じゃない」

「…どういこと？」

「国王一家はおそらく姿形を変えている。人相も色素も」

「どうやって」

「そういう薬があつてな。もちろん認可されてないし闇のものだけど、状況からみてそれで身を隠したんだろうってのがいま主流の説」

……こわい。それが正直な感想だった。やっぱり興味本位で関わってはいけないんじゃないの？ 好奇心でも興味本位でも、忘れられるよりいいから、とジェイは言ってたけれど。

もともとユリは、ライグヒト王には関心がなかった。この国に王がいたことすら知らなかったほどだ。ただ、たまたま研究室の前を通りかかったときに、寮の隣りの住人・ジェイを見つけて声をかけ、そのユリにヨウが声をかけて、ここに通うようになったのだ。

はじめは戸惑った。ライグヒトの人にとっては大切な存在のはず。

何も知らない自分が興味本位で話を聞くのは失礼じゃないか。そう躊躇するユリに、ジェイはぼそりとつぶやいたのだ。忘れられるよりいいから　と。

「薬学部のジョンソン教授がその薬の解毒剤の研究をしてるんだ」

「あ…たしかジェイがいる研究室の…？」

「そう。もと王家の主治医でね、宮殿にいた過去を公表している数少ない1人だよ」

「じゃあユリ、これ読んどいて」

ヨウに手渡された紙の束は、ジェイの書きかけの原稿だった。

この国には15年前まで王がいた。

国民は王室を慕っており、若い国王夫妻と一人娘の一家は国民に愛されていた。

しかし、近隣諸国の目には非常に時代遅れの体制と映った。なにせいちばん遅かった国でさえ、50年以上も前に民主化を果たしているのだ。

国外の知識人の影響を受けて、若い層を中心に少しずつ民主化への気運は高まっていたが、小さいながら歴史の長い国のこと。王制を守ろうとする保守派もまた、一步も退かなかった。

少しずつ、少しずつ、人びとのあいだの空気が悪くなっていき、いよいよぶつかり合うかと思われたころ。

突然、国王一家が姿を消した。

はじめは互いの関与を疑っていたが、王宮殿の使用人がひとり残らず、十分な手当てとともに暇を出されていたことがわかり、国王自身の意志によって姿を隠したのだとわかった。

民主化推進派は攻撃対象を失い、王制擁護派は御輿を失った混乱のなか、もともと争いを好まない民は手を結び、新しい政府を起こしたのである。

王の失踪には何か意図があつたのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思っている者もいる。

真実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか。

「……………」

「…ジェイは王さまの味方なんだね」

ヨウが顔をあげ、問うような視線をユリに向けた。

「これ読むとそんな気がする」

ヨウの視線がユリの頭上を通り越すと、背後からばそりと聞こえてきたのは。

「そついうふうに育てられてたんだよ、15年前までは」

ジェイだった。

「王さまは敬愛すべき存在だって刷り込まれたんだ。そんなに簡単に憎めない」

でも、とカバンをおろす動作をはさみ

「許せるかどうかはわからない」



そう言って、ロボのパソコンを覗きにいく。

ジェイがそんなふう王のことを話すのは初めてで、びっくりして聞き流しそうになった。このあとのジェイの発言を。

「その写真、どこで…」

画面上にいたのは五歳位の少女。先ほど話していた「失踪当時のリィ姫」だ。ヨウの指摘を受けて合成し直しながら、先ほどと同じような説明をロボがする。その隙に、ジェイはスツといつものポーカーフェイスを取り戻していた。

しかし寸前に見せた明らかな動揺。瞳は揺れていて。そして何かがユリの頭に引っかった。

なんだろう。何かおかしかった。

その写真、どこで…？

その写真、どこで手に入れた？

ハッとする。

それは、“その写真”が何かを知っている人の発言だ。

ヨウも同じことに気づいたらしい。目を眇めている。

ジェイはリリーの顔を知っている？　しかし公式の写真は残っていない。ならば直接見た？　いや、五歳で一度見たきりの顔が記憶に残るものか。ならば　何かもつと深いつながり　？　たとえば非公式の写真が手に入るような。15年も顔を覚えていられるような。

そこに考えが至り、訊いてみてもよいものかどうか、ユリとヨウが目配せをしているのをしり目に、ロブが無邪気に問うた。

「ジェイはリリーに会ったことあんの？」

…凍りついた。ジェイは表情を崩さずに、どうして？と返す。

「未成年だったから公式行事には出てなかったっていうし、だから写真も残ってないけどさ。誕生日の参賀には姿を見せたらしいじゃん。首都に住んでたんならそういうの親に連れてかれなかった？」

…よかった。他意はない。そもそもロブの腹に、見えている以上の感情など隠れていない。ジェイも警戒をとく。

「…あつたとしても五歳じゃ顔なんて覚えてないよ」

そこにきつと嘘はないのだろうけれど。

その言葉はユリが知りたかったことの答えにはなっていないくて。

そして、

けれど先ほどの推測を確信に変えたのだった。

「……………」

「ジェー！ジェー！」

いつもとは違う泣きそうな声で、息をきらして走ってくる。

「…はあ…これ…これ、もってて」

渡されたのは写真。

宮殿は数日前から何かがおかしかった。気づかれない程度にひとりずつ使用人が去っていき、昨日はとうとうフレッドが「故郷に帰る」と言って出て行った。

「わたしの写真をもやしているの」

「どっして」

「わたしのかお、変えちゃうの。名前も、変えちゃうの」

「リリーがいなくなっちゃうの？」

「だから、これ、ジエーがもってて」

澄まし顔が気に入らないと言っていたのに、咄嗟に持ち出せたのがそれだなんて。

「わたしのかお、ジエーはおぼえていてね」

じゅうぶんには理解しきれないままに、ただただうなづく。

「おぼえてる。わすれないよ。かおが変わっちゃってもリリーのこ  
とわかるよ。ちゃんとリリーって呼ぶよ。やくそく……」

「はやくかくして！」

姫、と呼ぶ声が近づき、あわててせかす。

「姫、写真を持ち出しませんでしたか？」

「…ごめんなさい。これをジェーに渡そうとしたの」

カモフラージュ用に持ち出したもう一枚の写真を侍女に渡すときには、もう大人に見せる顔になっていた。大人の前では決して泣かないリリー。だから最後に見た顔は、いつものわがままな彼女ではなく、「姫」の笑顔だった。

指切りは間に合わなかった。写真を隠していたから、手をふることもできなかった。

両親と宮殿を出たのは翌日のこと。そのときにはすでに国王一家が姿を消していたというのを知ったのは、大きくなってからだった。

|||||

引き出しの奥から本を取り出し、そこに挟んであった写真を手に取る。

色褪せ始めた写真。これを見るのは久しぶりだ。はじめの頃は、親の目を盗んでは何度も手に取り、彼女の顔を記憶に焼き付けようとしていた。しかしいつからか、写真のこの澄まし顔しか思い出せなくなっていた。

だから先ほど、ロブが合成したりリーの笑顔を見たとき 予想もしないほどに記憶が押し寄せて、脳裏に甦る彼女のいろいろな表情

にうつたえてしまったのだった。

どんな顔になってしまっても、リリーに気づいてみせる。そんな約束を守るために、教授の解毒剤の研究と一緒にやらせてくれと手を挙げたのだ。

けれどどうやって彼女を探したらよいのかわからない。もう一度会えるなんて、自分は本当に思っているのだろうか。

「ジェイ！いるー？」

ボタンと本をとじて振り返ると、左手の人差し指をおさえながら、ユリが部屋の入り口に立っていた。

「ね、絆創膏ある？ 包丁でやっちゃったの」

苦笑して薬箱を取り出す。指を切った、腹が痛い、言うっては、ユリはいつもこの部屋にくる。

「うちを保健室だと思ってるだろ」

「保健室行くより近くて確実！」

絆創膏を手渡そうとして、ジェイは顔をしかめた。ずいぶん血が出ている。

「手、貸して」

傷口を洗い、座らせて絆創膏を巻いてやる。そのまま手をつかんで、少し高い位置で支えた。

「血止まるまでしばらくこうしてな」

「…ありがとう」

もじもじと視線を逸らし、ユリが話題を探しているのがわかる。

「やっぱあれだね、遠くの保健室より隣りのジェイだね」

「俺、医学部じゃなくて薬学部なんだけどね」

「…薬学部といえば、さっきロブに聞いたんだけどさ」

うん？ と顔を見るが、ユリのほうはまだ目を伏せたままだ。ストリート黒髪から見え隠れするまぶたに、ああユリはまつ毛も黒いんだなあなど意味のないことをぼんやりと考える。

「ジェイがその…研究してるのって…」

「ああ、解毒剤？」

そこで初めてユリが顔を上げた。至近距離で視線が交わる。

「それってやっぱリ、リリー姫を助けるため…？」

問われて、今度はジェイのほうが目から逸らす。

「…正直わからない。どうしたいのか、自分でも」

でも、と続ける。

「もし薬ができたとして、姫に使うことはないよ」

「どうして？」

「薬が薬だからね。本人の承諾なしに使ってはいけないというのが教授の考えなんだけど。本人はその薬が自分に使われていることをきつと知らないだろうから」

たしかに。当時五歳の子どもでは、自分の身に起きたことを知るには限界があるだろう。

「そう……」

二人の間に沈黙が降りて、ユリがまた、目を伏せた。

……ユリが視線を泳がせる理由は知っている。手が少し汗ばんでいる理由も、沈黙を恐れて必死に話題を探している理由も。わかっているんだよ、ユリ。

自分がもう少し軽はずみだったら。あるいは自分がもう少し傲慢だったら。

とうにユリはこの腕の中にいただろうに。自分の中で整理がついていないから、宮殿で育った過去を明かせずにいる。口にできない秘密を持ちながらユリの手をとることはできなくて。ユリの気持ちに自分の気持ちにも、目を伏せたままにいるのだ。



「……………」

ジェイがこちらを見ている。こんなに近くで。

会話が途切れれば、ユリはもう顔を上げることができない。ジェイの眼差しも、つかまれた腕も、体温を上げていく。

「もう、大丈夫だから」

そう言っユリは腕をほどいた。

「ね、作ってるのポテトサラダなんだけど、できたら持ってこようか？」

これのお礼、と、絆創膏を見せて言う。

「へえ。子どものころ好きだったな。久しぶりに食べたいけど」

時計をちらりと見て、

「18時に教授のところに行く約束なんだよ」

「そっか……じゃ、一人分冷蔵庫に入れとこうか？」

「ほんと？ それはありがたいな。絆創膏一枚でおかすが一品増えるならいつでも歓迎だよ」

「じゃ遠慮なく。お宅の薬箱、頼りにしてます」

ふふ、と笑いあい、大学へ向かうジェイを見送ってユリは自分の部屋へ戻った。いつもの空気に戻せたことに安堵しながら。

「…ではレポートにまとめて来週お見せします」

「うん。資料は取り寄せておくから」

「よろしくお願いします」

ジョンソン教授の研究室で論文の途中経過を報告し終え、資料類を片づけ始めたジェイの手元に、教授が雑誌のページを開いて置いた。

「何です？」

「その人、知ってるか？」

話題の人、というタイトルで取り上げられているのは、ガーデンデザイナーの肩書きを持つアルフレッド・R氏。ライグヒト出身だが19歳で留学をし、そのまま海外で頭角を表して数々の賞を受賞したのち、15年ぶりに凱旋帰国をしている最中だという。

「こういうものは疎くて…」

「覚えていないのも無理はないか」

「？」

「宮殿にいたころ、見かけたことがある。庭師に弟子入りした若いのが確かこんな顔だった」

「……！」

「君たちはよく遊んでもらっていただろう」

「…フレッド兄さん…」

かすかな記憶と面影を重ねてみるが、心もとない。しかしその存在はよく覚えている。父のもとで庭師の修行をしていた。ジェイもリリーも、いつもまとわりついて遊んでもらっていた。

「懐かしい…」

宮殿にいた者同士は暗黙の了解で連絡を取り合うことを控えていたから、フレッドの消息もあれ以来不明だった。今でも植物に関わる仕事をしているとは。父が喜ぶだろう。

「芸術学部をやつらが講演に招いたらしくてね。うちの大学に来るんだそうだ」

そこでいったん言葉を切り、ジェイの反応を確かめるように継ぐ。

「君んとこのヨウから常々頼まれているんだよ。王家のことを知る人がいたら紹介してほしいとね。彼に連絡してみようかと思うんだが」

どう思う？　そう訊ねられて、即答ができなかった。会いたいけれど、でも。

「君は宮殿にいたことをまだ明かしていないんだろう？　昔を知る

人が現れるのは具合が悪いだろうか」

「あ…いえ…はい…けど…」

混乱するジェイの肩を、教授が優しくぽん、と叩く。

「君のことも含めて伝えてみるよ。複雑だろうが会いたいののは確かだろう」

「はい…ありがとうございます」

＝ ＝ ＝ ＝ ＝

…頭が痛い。

ポテトサラダを約束通りジェイの部屋の冷蔵庫にしまい、メモを置いて部屋を出ようとしたところで、ズキリと痛む頭にユリは顔をしかめた。

勝手知ったる洗面所の棚から頭痛薬をもらう。

さっそく、お言葉に甘えて　　ね。

薬をもらったこともメモに書き足そう。何か書くものはないかしら。ジェイの机を見渡したユリは、一冊の本を見つけた。

「これ…！」

もう絶版になっている童話集。児童文学を専攻するユリが研究の資料に使おうと、方々の図書館に在庫を問い合わせていたものだった。まさかジェイが持ってたなんて。

ばらばらとページをめくる。いけない、夢中になって読み進めてしまいそうだ。さすがにメモだけで勝手に借りていくのは悪いよねえ……。ジェイが帰ってきたらソッコー借りよう。

逸る気持ちで改めて本を眺める。凝った装丁。いちばん後ろのページをめくり、初版本であることを確かめる。

と、裏表紙の布がめくれているのに気づいた。

わ、ちゃんと修復しないと。

はがれたところをそっとめくってみる。だいじょうぶ、破れているわけではなさそうだ。そこに何かが挟まっていることに気づきなぜだろう、手にとってしまった。

……写真？

見たことのある幼い女の子。

カッと熱が上がった気がした。

この顔を見たのはロボのパソコンの画面で、だ。

「リリー姫…！」

どくん、どくん、と脈打つ音が聞こえる。

わからない…頭痛い…。

なぜジェイがリリーの写真を持っているの？ やっぱリジェイはリリーとつながりがあった？ 隣りに立つ小さな男の子は、じゃあこれはジェイ？ 写真の子どもたちの背後に建つのは、

「…ここだ」

この学生寮。かつては王宮殿の使用人の宿舎だったというこの建物。

その前で澄ました顔をしている2人の子ども。

やっぱりジェイは、リリーと知り合いだったんだ。あんなにこだわっているのもただの愛国心なんかじゃなくて、二人にはもつと深いつながりがあつて。

「頭痛い…」

湧き上がる苛立ちは、嫉妬？ 姫に？

混乱し立ち尽くすユリの後ろで、カチャリと部屋のドアが開いた。

|| || || || ||

教授に聞かされた話に軽い興奮を抑えられぬまま、ジェイは寮へ戻った。

部屋へ入ると、ユリがいる。そうだ、夕飯のおすそ分けをくれると言っていた。

「来てくれてたんだ。サンキュ」

返事をしないユリに目をやると、手に持っている本にギクリとする。

「その本、持ってた？」

不自然にならぬよう気をつけながら、ユリの手から本を取り上げ、隠した写真を取り出そうとした。が。

それはすでにユリの手にあった。

「ユリ、その写真」

「リリーだったんだね。ジェイを苦しめてたのは」

「ユリ…？」

「どういう関係だったのかはわかんないけど、なんか深いつながりがある、だからリリーは今でもこんなふうにジェイをしばりつけていて」

「…やめろよ」

「ジェイを苦しめてるんだ」



「やめろって」

「リリーなんて、もうどこにもいないのに」

「ユリ」

「わたしリリーが嫌い」

「やめろ！」

ハッと我に返る。

初めて聞くジェイの大きな声に、驚いたのはユリだけではなかった。  
ジェイもまた、自分の怒声に呆然としていた。

視線を落としたままユリが早口に言葉を継ぐ。

「本、借りてく」

「ん」

「サラダ、冷蔵庫」

「ん」

「頭痛薬もらった」

「ん」

「……ごめん」

「……」

ボタンと部屋を出て行くのを背中では聞きながら、ジェイは自分の動揺の理由に必死に気づかぬフリをしていた。

＝ ＝ ＝ ＝ ＝

翌日。

ヨウからの招集メールを受けてたまり場に向かったジェイを、ジョンソン教授が出迎えた。

「アルフレッド氏が快くOKしてくれたぞ」

「……！」

「アルフレッド氏は宮殿で庭師の見習いをされてたそうだ」

ヨウが興奮気味に語る。冷静沈着なヨウにしては珍しい。

「オレが作ったリリーの想像図、本人に似てるかどうか見てもらおう」

教授は覚えてないっていうし、とロブがちらりと教授を見る。

「15年前の子ども顔なんざ覚えていないよ。じゃあ、時間や場

所の打ち合わせはヨウから直接してくれ」

教授を見送り、ようやく興奮の覚めたヨウが、ふと気づいたように言う。

「そういえばユリが来ないな。いつもこの時間は講義なかったと思っただけ……具合でも悪いのかな。なんか聞いてない？」

「ああ、そういえば……」

昨夜の去り際に頭痛薬をもらった、と言っていたのを思い出す。昨日は動揺して聞き流してしまったが、だいぶ悪いのだろうか。

「部屋にいたらこのこと伝えといて」

「そうだな。声かけてみるよ」

昨夜は少し体温が高かったかもしれない。熱を出して寝込んでいる姿を想像し、ジェイはスポーツドリンクを買って寮に向かった。昨夜の気まずさはひとまず置いて。

ユリの部屋のドアをノックしても、携帯にかけても反応がない。この寮ではだれも鍵などかけないから、様子をのぞいてみることはできるのだけど、さすがに女子の部屋を開けるのは気が引ける。

ユリの部屋の前でしばし逡巡していると、ユリのクラスメイトが通りかってくれた。事情を話し、部屋をのぞいてもらう。

「出かけてるみたいよ」

部屋の中を見せてもらうと、確かにユリは不在で　けど　何もかもやりかけで慌てて飛び出したような散らかり具合に違和感を覚える。

「携帯も置きっぱなしだし、どこか近所ですぐ戻るんじゃない？」

「ならいいんだけど…」

礼を言って部屋に戻る。考えすぎかもしれない。単なる頭痛は薬を飲んでおさまったのだろう。

……うちに頭痛薬なんてあったか？

まさか。

飛びつくように薬箱を開ける。茶色いビンに入れたのは、教授の指導を受けて試作した解毒剤だ。3錠減っている。これを飲んだのか？

落ち着け。

これはあの薬の効果を打ち消す解毒剤だ。薬を服用していない人には何の影響もないはず。大丈夫だ。きつと。

震える手を抑えながら、ジエイは教授に電話をかけた。

「…確かなのか？」

ジェイの報告を受け、教授が発した言葉はそれだった。

「本人が不在なので確証はないんですが、状況から見て薬を飲んだ可能性が高いんです……先生、あれは関係ない人が飲んだ場合には副作用はないはずでしたよね？」

「ああ大きなことは起きないが……まずは本人を探して、薬を飲んだのかどうか、飲んだとしたら何時ごろのことか、確認しなさい」

「はい」

「その学生は何学部だ？ 俺から家族に連絡をとる」

「家族……ですか！？ 重篤なことにはならないのでは……」

ジェイ、と厳しい声が聞こえ、電話を握り直す。

「今何の話をしている？ 解毒剤を関係ない人が飲んだ場合、の話だろう。その学生が過去にあの薬を服用したことがないかどうか、確かめる必要がある」

「まさか」

だってあの薬は闇のもので。

「服用していないことを確認したのか？」

「いいえ…」

「どちらにしても、まずは本人を探せ。見つけたら安静にさせなさい。大きな副作用がなくても微熱くらいは出るかもしれない。それと」

「はい」

「薬剤の保管に関しては報告書を提出するように。すべて済んでからでいい」

「…はい」

電話を切り、外へ出た。財布も携帯も置きっぱなしということから、学外へは出ていないだろうと見当をつける。事情を話してヨウやロブにも探してもらえ、と脳が指令するが、教授の言葉がジェイにブレーキをかけていた。

そして寮の付近から徐々に範囲を広げていき、キンモクセイの木立にさしかかったとき。木の根元の芝に座り込む女性の半身が目に入った。

「ユリ！」

駆け寄って確かめる。しかし、身を起こして振り返ったその女性は豊かな金髪。

「あ、すみません」

人違いを謝り、来た道へ引き返した。引き返そうと、した。

「ジェー……？」

……！



去りかけてピタリ、と動きを止める。

語尾を伸ばした発音。そんな呼び方をするのは1人しか知らない。  
ゆっくりとふりむく。まさか。けどまさか。

「ジェー！」

「……リリー？」

「覚えていてくれた？」

「本当に、リリー、なの……？ どうして……」

あまりに突然のことに自分の目が信じられなくて、目の前の女性を  
まじまじと見つめる。そして、ジェイはあることに気付いた。

その服、ユリが着ているのを見たことがある……！

「……ユリ。ユリだろ？ ユリがリリーだったのか……？ じゃあやっ

ぱり解毒剤が効いて…どうして今まで黙っていた？ 俺のことわかってたのか？」

矢継ぎ早に問いかけるジェイを、低い声が遮った。

「ジェー、私のこと、“リリーであることを思い出したユリ”だと思ってる？」

「え？」

「違うわ。私はユリじゃない。“ユリって名乗らされてたことに気付いたリリー”よ」

「なに…言ってたんだ？」

「ユリなんて人、最初からいないの。私は、私をもうユリには返さないから」

頭が状況に追いつかない。呆然とするジェイの手の中で、携帯電話が鳴った。

「ジェイ、ユリは見つかったか」

「先生……今、ここに」

目的語をなんとすればよいかわからない。

「そうか。ジェイ、彼女のご両親と連絡がついた。彼女はあの薬を服用していたよ。15年前に……ジェイ、彼女のご両親は」

そくだ。ユリがリリーだったのなら、彼女の両親は元国王夫妻。おそらく教授もそれを知ったのだろつ。声が少し、上擦っている。そしてそれは、目の前の出来事が現実であることをジェイに示していた。

教授からいくつかの指示を受け、電話を切ると、ユリ、いやリリーを見る。

「教授が ジョンソン先生だよ。覚えてる？ 先生が、歩けるよ  
うなら診察するから連れてこいって」

「……行くわ。先生にも私を見ていただきたいし」

ああ、その目はたしかに、負けず嫌いなあの子のものだ。

少し迷い、歩き始めた彼女にユリではなくリリーと呼びかける。

「教えてくれ 何があった」

〓 〓 〓 〓

昨日はもともと頭が痛くて、ジエイのところでもらった薬を飲んでそのまま寝てしまった。夜中に熱が出て、暑くて、それでも昼過ぎまで眠り続けて。ノドがかわいたなって水を飲もうとして、顔にかかる髪に違和感を覚えて。

鏡を見たら、昨日までとは違う顔があった。

あれ、私金髪だったっけ。この顔、昨日ロボのパソコンにあったのと少しだけ似てる。

少し頭がぼうつとしていた。それが徐々に晴れてくる。

違う。

違う、違う！

これが私だ。私はこっちだった。今までが違ってたんだ。どうして？　なんで私は黒髪だったの？　なんで、私はユリと名乗っていたの？

5歳までのかすかな記憶。私はたしかにリリーと呼ばれていた。そして昨日までの、ユリとしての記憶。たどってもたどっても6歳までしか思い出せない。その間をつなぐのは。

そうだ。ジェイの書いた原稿。会誌の。ピタリとピースがはまり、

「　　っ！！」

声にならない悲鳴をあげた。

「怖くなって飛び出して、やみくもに走ってたらキンモクセイの香りがしたの。ここ、よく一緒に隠れたりしてたよね。懐かしい」

「つまり、昨日までの記憶もちゃんと持っているのか。ヨウやロブのことも覚えてる？」

もちろん、とリリーがうなずく。

「それじゃ…」

ユリはどこへ行った？

ジェイのその問いをわかっているかのように、リリーは表情を消して歩き続ける。校舎への道も迷うことはない。

「私を探してくれてたんじゃないの？」

「それは、そうさ…だけど」

「今度はユリを探すの？ ユリなんて、ただの同級生じゃない」

「ただの、って…」

「違うの？ 大事ななの？ 私との約束よりも？ そんなそぶりなんて見せたことないくせに」

「リリーもユリも、きみなんだろ。どうしてそんな」

「違っつて言ってるでしょ!」

癇癢を起こしたように叫ぶ。しかし息をつく、ああそうね、と笑った。

「同じところ、あったわ。ユリはリリーが嫌いだったでしょう。私も同じ。私も、」

ユリが嫌い。

「やあ、本当にきみか」

「先生、私を覚えておいでですか」

「もちろんだとも。もう一度会えるとは思っていなかった」

よかった、誰にも歓迎されないのかと思った。そう言って涙ぐむリリーの横顔に、そういえば自分がぶつけたのは戸惑いばかりだったとジェイは気づく。再会の喜びだとか、無事であることへの安心だとか。そういうものを忘れていた。

「リリー、きみのご両親が明日にもこちらへ到着される」

両親、と聞いてリリーの目が怯えた様子を見せる。

「先生……私の両親は……お顔が、記憶の中でつながらないんです」

「電話で母上とお話したよ。私からの電話に非常に驚いておられた。大丈夫、きみのご両親はたしかに王様ご夫妻だ」



「よかった…」

「お二人がいらしたら改めて説明するがね、まずはきみに話しておかねばならない　ジェイ、きみも聞きなさい」

ジェイを座らせ、微熱のあったリリーには寝台に横にならせて、教授は“解毒剤”についての説明を始めた。

「リリー、きみがどこまで把握しているかわからないが。きみは五歳のときにある薬剤を服用した。そのせいできみの髪は黒髪になり、王様によく似ていた顔立ちも、まったく様変わりした。ここまではいいね？」

こくりと小さくうなづく。

「あのとき薬剤を処方したのは私だ。とは言ってもあれは王家に代々伝わっていた秘薬だね。私も先代の主治医から引き継いだものを渡しただけだった。しかしその後を見守ることができなかったのが気がかりで、いつか、もしかしたら必要になる場合もあるかもしれないと、解毒剤を作り始めたのだよ」

解毒剤、と聞いてリリーがジェイのほうをちらりと見る。

「そう。今はジェイとともに研究をしている。彼が加わってから研究のスピードが上がってね。試作品を作るまでになった。きみが昨夜誤って口にしたもののがそれだ。そして、ここからが本題になる」

そこまで話すと、いったんお茶で口を湿らす。すべて予測でしかないけれど、という前置きを挟み、話は続いた。

「何度も言うようだが、あの薬は研究途上のものだ。きみにどんな作用をもたらすか、正直予測できないのだよ。もしかしたら、薬の成分が体から抜けるとともにきみはまたユリに戻るかもしれない」

「そんな…!」

「そういう可能性も捨てきれないということだ。だからしばらくは…そうだな、2、3日は様子を見させてほしい」

「2、3日…」

「少し眠りなさい。微熱があるだろう」

「眠るなんてできません、先生！ 眠っているあいだに自分がいな

くなくなってしまうかもしれないなんて」

「リリー」

「そうだ。先生、ジェイの部屋にはまだ薬が残っていました。切れそうになったらあれをまた飲めばいいんでしょう？」

「リリー、聞きなさい。それが安全かどうかすら、まだ未確認なのだよ」

「構いません。なんなら私を使って実験してくださっても」

「リリー！」

たまらず口を挟む。自分がした事の重大さを目の当たりにし、呼びかけたものの、ジェイは言うべき言葉がわからなかった。しばし無言で見つめ合う二人に教授が声をかける。

「そういう可能性もある、というだけだ。もちろんこのままの姿で続ける可能性だってある。まったくわからないのだよ。とにかく今日は安静にしていなさい。ジェイ、」

「はい」

「きみは部屋が隣りだと言ったね。そばについていてやりなさい。私も今日は学内に泊まる。何かあればすぐに連絡するんだ」

二人が教授の元を辞すと、外は暗くなり始めていた。リリーの体調を気づかいゆっくりと歩く。

「ジェー」

「うん？」

「一人で戻るから大丈夫。授業あるんでしょ、行ったら？」

「今日はもうないよ。体、しんどいだよ…？」

「ううん。平気。別についててくれなくていい」

トゲトゲしい様子に、かける言葉を選ぶことができない。

「ジェー！」

呼ばれて振り向くと、先ほどユリの部屋を覗いてくれた同級生が数人の仲間と連れ立って歩いていた。

「ユリ見つけた？　今の講義にも来てなかったんだけど」

「ああ、連絡はついたよ。ちょっと調子悪いみたいだ」

「そう。じゃあ明日も休むようなら代返しとくわ」

そう言って手を振る友人を、リリーは足を止め、ぼんやりと見つめる。続けざまに、今度はヨウに呼び止められた。

「ジェイ、さっきの話だけど。…そちらは？」

リリーに会釈をしながらヨウが問う。

「ああ…幼なじみ、かな」

「へえ…どうも。ちょっと失礼。ジェイ、アルフレッド氏と連絡がついたんだけど、講演会の日では時間が十分取れないだろうから」

てわざわざ時間を作ってくださるって言うんだ。ただ明日しか空いていないらしくて。急だけど構わないかな」

「俺は構わないよ」

「じゃああとはユリだな。さっきから連絡がつかないんだ」

「ああ、やっぱり具合がよくないらしくて。部屋で寝ていたよ」

「そうか……明日は出て来れるかな」

「どうかな。まあ伝えておくよ」

頼むわ、とヨウが手を振り去って行く。その背中を、リリーはやはりじっと見送る。

「どうした？」

「何でもない。今の話、なに？」

再び寮に向かい歩き出す。

「ああ、最近有名なライグヒト出身のガーデンデザイナーの人がいてね。今度大学に講演に来るっていうんで、王研で面会を申し込んだんだ　フレッド兄さんだよ」

足が止まる。

「……！　お兄さん？　本当に！？」

「うん。ジョンソン先生が連絡を取ってくれたんだ。きみも会いたいだろ」

「もちろん！　……もちろん、会いたい、」

けど。

会っていいのかわからない。言外に含んだその言葉に、寮に着くまで二人は黙って歩いた。

「じゃあ、具合悪くなったらすぐに呼んで。何時でも構わないから」

「…ジエー、写真を見せてくれる？」

「写真？」

「うん。あの、子どもの頃の」

「ああ…いいよ、持って行くからきみは先に部屋に入って休んでな」

「  
「  
「  
「  
」  
」  
」  
」  
」

部屋に入ったリリーを待っていたのは、布団がぐちゃぐちゃになったベッドと、テーブルに転がったグラス。

慌てて飛び出しちゃったからな…。

グラスを直し、テーブルに置いてあった携帯電話を手についた。不在着信を知らせるランプが点滅している。

初めの何件かは、ジエー。母からのメールも入っている。これからお父さんとそちらに向かうから、待っていて、と。そしてそのほかはすべて。



ユリ、今日欠席？

ユリ、連絡ちょうだい

ユリ、大丈夫？ ノート取っておいたよ

ユリ、ユリ、ユリ、

「っ！」

携帯電話を投げつけた。

「リリー、入るよ」

ジェイが部屋に来、その手にあつた写真をすぐるように見る。そう、大丈夫。確かに自分は存在した。

「ずっと持っていてくれたんだね。ありがとう。……これ、どうしてこんなに硬い表情してるんだろう。ああ、たしかケンカしたあとだったかな。ね？」

しかしジェイが見ていたのは、先ほど叩きつけられた携帯電話。それを拾い、はずれた電池を直しながら問う。

「どうしたの、これ」

「…みんな、ユリ、ユリって」

「だってユリの携帯じゃない」

「そうだけど。さっきのヨウたちもユリのことばかり。ユリはたった1日いないだけでみんなから心配されるのね」

「……」

「そうやって私がいたはずの場所を取っていくんだわ」

「…けどここはユリの部屋じゃないか。きみが着ているその服も、ユリのもの。」

「ジェーは私を心配してくれてたでしょう？ 私を探そうとしてくれてたんだよね」

リリーの戸惑いを理解してやるべきなのに。たしかに会いたかったはずなのに。今はただユリの身が気遣われてならない。そのユリを否定しようと必死のリリーに、隠れていた思いが姿を現す。

「そうだよ…会いたかったよ」

「ユリじゃなくて、私、でしょっ?」

「リリーに、会いたかった」

「ずっと私でいていいんでしょう?」

「会えたら、言いたいことがあった」

「なあに?」

「……」

「……なに?」

携帯電話を机に置きながら、ジエイは迷っていた。言うべきではないと、わかっていた。けれど、ずっと抱えてきた本音だ。リリーの目を見る。

「……もう、俺を、解放してくれ」

スツと、リリーの顔から表情が消えた。

そう。「リリーが嫌い」とユリに言われたときの動揺はきつと、隠していた感情を言い当てられてしまったから。

「……  
そうね、悪かったわ」

おやすみなさい。そう言ってジエイを帰らせたその顔は、あのとき

キンモクセイの前で別れたときと同じ、大人向けの“姫”のものだった。

研究室のドアを開けると、見知らぬ中年の男女が座っていた。二人とも黒髪で、男性のほうは少し白髪混じり。ジョンソン教授と話していた顔を上げ、こちらを向いた。

「お父さま、お母さま！」

隣りにいたリリーが駆け寄る。そうか、ではこの人たちが。

「そう呼ぶということは、きみは今リリーなのだね。姿だけではなく、心も」

優しくリリーを抱き止め、声をかけると、部屋の入り口で固まっているジェイに視線を寄越した。

「きみは…」

「あの、このたびは僕の不注意で、」

「ジェイね？ ジェイでしょう！」

女性が嬉しそうに立ち上がる。

「ユリがよく話していたのよ。お隣の部屋の“ジェイ”のことを。」

同じ名前だとは思っていたけれど、本当にあなただったのね」

なんてご縁かしら。そうつぶやき目を潤ませるこの人は、ユリの母親で、そして。

「お……」

おうひさま、と呼んでよいのかわからず、ただ頭を下げるしかできない。

「そうか、きみはあのジェイか」

「…お久しぶりです」

ともかく座りなさい。そう教授が声をかけ、一同が落ち着いたところで、ユリの父　元国王が、ゆっくりと話し始めた。

「いま先生から伺ったのだがね、リリー。きみのその姿はいつまで保つかわからないそうだ」

「はい」

「すぐに戻るならいい。もしもこのままだとしたら、リリー。帰ってきなさい。きみはこの国にいてはいけない」

「お父さま…！」

「もちろんきみだけではない。かつての王族は誰一人、この国にいてはいけなのだよ」

「私は、私でいてはいけなの？」

「まだ15年だ。王政を復活させようと考えている人々はまだまだいる。彼らは王族を見つけ出して担ぎ上げようとしているんだ。利用されてはいけない。この国を混乱させてはいけないんだ」

「せつかく戻れたのに…やっと、思い出したのに」

そう。ここに自分の居場所はないこと。この場所はユリのものだということ。全身で感じ取ってはいたけれど。

「リリー」

父親は優しく手を取る。

「覚えていないのも無理はないがね。きみはあるとき、私の話をきちんと理解してくれた。きみはちゃんと納得して、自分であの薬を飲んだのだよ」

「私…が？ 自分で？」

「そうだ。あれがきみの、最初で最後の王族としての仕事だった」

|| || || || ||

あのとき、平和に民主化を進めるために私は姿を消すという選択をした。

王政を廃止すべきだという考えは持っていたが、それを国王が指導しては意味がない。あくまでも国民主導でなくてはいけない。同時に私たちの失踪を推進派の仕業と疑わせてもいけなかった。だから私は逃亡という形を取った。王妃と姫とともに　そう、あれは逃亡だよ。

「逃亡…」

つぶやいたジェイにひとつ頷き、王は続けた。

「国の平和のために、私たちは存在を消す必要があった。顔も、名前も変えてね。それをリリーにも説明した」

「それで、私は納得を…？」

「ああ。わかりました、と言ってくれたよ」

そうだ。私は知っていた。自分の身に起きることを。リリーと



いう存在を抹消することを納得したからこそ、ジェイに写真を預けたのだった。彼にだけは覚えていてほしくて。

「小さかったけれど、きみは立派な“姫”だったよ」

「記憶は…？ 自分で納得していたのなら、どうして私は覚えていなかったの？」

「…すべて国を思ってたことだったが、きみの記憶を消したことだけは一人の親としての行動だった。きみに、何の憂いもない新しい人生を送らせてあげたかったんだ。だから催眠で記憶を消した。けれどそれは親のエゴだったかもしれないね」

「…お父さまとお母さまを責めるなんてできません…」

リリーを優しく撫でると、ジェイへと視線を向けた。

「さて、ここからは私たちだけで話をさせてくれるかね」

教授が頷き、ジェイを促して立ち上がる。

「ジェイ、わかってくれていると思うが…今日ここで私たちに会ったことは他言無用に願いたい。もちろんリリーのことも。誰にも明かさないでほしい。きみのご両親にも、だ」

「はい、決して」

どこかまだ実感のわかないまま部屋を出たジェイに、教授が声をかける。

「そろそろ時間じゃないのか？ 今日フレッド君が来るのだろう。私も行くよ」

「そうでした…！」

向かいかけて足を止める。

「先生…リリーは、フレッド兄さんには会わせてやれないんですね…」

「うむ。残念だがね」

心が晴れない。

一体自分は誰を思い、誰に同情しているのか。いつもわがまを言っただけで自分を困らせたリリー。いなくなったあともずっとその存在に縛られてきた。そう、ユリに指摘された通りだ。そして姿を現したと思ったら今度はユリを排除しようとする。

もう諦めろよ。俺を解放してくれよ。昨日はそう思ったのに。

いざりリーがいなくなると聞くと、心が重い。一体自分は誰を思い、誰に同情しているのか。ジェイにもわからなかった。

＝  
＝  
＝  
＝  
＝

「急にいろんなことを思い出して、戸惑っているでしょうね」

「お母さま……」

小さく首を横にふる。けれど 取っておいてくれたらよかったのに。小さい頃のことなんてどうせ忘れてしまうのだから。あんなに温かい思い出、取っておいてほしかった。

「さてこれからのことだね」

「はい……」

「きみにはユリに戻ってもらう。それはわかってくれるね？ しかし記憶については別だ。今度はきみが決めなさい。自分がリリーであることを、覚えておくか、消してしまうか」

「自分で……？」

うなずくと、王は大きく腕を広げた。

「その前に、顔をよく見せてくれるかい？ 久しぶりに会えた、私たちのリリーの顔を」

「お父さま…！」

「大人になったきみに、会えるとは思っていなかった」

父親の胸に飛び込んだリリーの髪を、母親が優しくなでる。

「ねえリリー。“ユリ”も“リリー”も、どちらも同じ花の名よ。どちらも、お父さまとお母さまがつけた名だわ」

「…百合の花」

そうだ。両親にとってはリリーでもユリでも変わらない。どちらも愛する娘。

あとは私が、納得すればいいだけ。

〓 〓 〓 〓 〓

教授と二人、ヨウに指定された教室に行くとロブがいた。ヨウはフレッドを迎えに行っているらしい。

「ユリはやっぱり来られないって?」

「ああ…」

「ふーん。けどまあユリはそんなに興味持ってるわけでもないしな」  
たしかに。もともとユリはライグヒト王に関心なんてなかった。王研に入ったのだって、たまたま。ジェイの隣の部屋に来たのだってそうだ。なんて偶然。

そして廊下から人の声が聞こえてきた。

「こちらです。どうぞ」

「失礼　やあ、はじめまして」

ヨウとともに部屋に入ってきた男性は、教授に会釈をし、ロブに視線をやり、そして、ジェイを正面から見た。面影が、あるようなないような。大好きだった兄さん。

「改めて紹介します　教授は面識あるんですか?」

「いや、直接会うのは初めてだね」

「ええ。私は庭師の弟子に過ぎなかったから、主治医でいらしたジョンソン先生を存じ上げてはいたが、接点はなかったよ」

そうでしたか、と頷き、ヨウがこちらに自己紹介を促した。まずはロブが名乗り、そして。

「こんにちは。ジェイです」

「…よろしく」

差し出された手を握る。その目は優しくかった。

「さて…何か王家にまつわる話を、とのことだが」

席につくと、フレッドは顔の前で手を組みゆっくりと話し始めた。

「さっきも話した通り、私は王宮殿の庭師の弟子だった。弟子入りのしたばかりだね。宮殿で働いていた期間は一年にも満たなかったかな。とにかくあそこでは一番の若造、新参者だった。だからあのとき何が起きたのかを聞きたいのだとしたら、残念ながら期待に沿えない」

「当時は何と言われたんですか」

「何も。ただ出て行きなさいと親方に言われたただけだ。親方が宮殿を退職すると言ってね。最後まで面倒をみれずにすまない。それで私は実家に戻り、留学をしたんだ」

「そうですか…」

「私が今日きみたちに会いに来たのはね、リリー姫のことを話したいと思ったからなんだ。宮殿の太陽だった姫を、忘れないでいてあげてほしくてね」

リリーを、忘れないために…？

「それは願ってもないことです。リリー姫に関する公的な記録はほとんどなくて」

そう答えるヨウに、フレッドも頷きを返した。そして語り出す。姫と、同じ年の少年。宮殿にいた2人の子どものたちのことを。

王宮殿には当時、子どもが2人いた。ひとりはもちろん、国王夫妻の一人娘、リリー姫。そしてもうひとりは、住み込みで働いていた庭師の息子。そう、私の師匠の息子だった。

子どもたちは同い年でね。宮殿には2人の他に子どもはいなかったし、少年の母親もまた宮殿内で仕事をしていたから、王妃が許可をして少年も一緒に姫の養育係に世話をさせたそうだ。だから2人はいつも一緒にいた。物心つく前からね。

事情が変わったのは姫が五歳の誕生日を迎えてからだ。ライグヒト王室では、五歳を迎えたその日から帝王教育が始まる。王位継承者であるリリー姫にも、家庭教師がついた。

さすがに帝王教育に少年を同席させるわけにはいかないから、それを機に少年も父親の仕事場で日中を過ごすことになった。簡単な手伝いをさせてね。

しかし、それまで毎日一緒にいたのを急に離しても、子どもたちは納得しない。2人とも、しょっちゅう抜け出しては互いを迎えに行つて、大人たちから隠れていたよ。

〓 〓 〓 〓 〓

フレッドが語る思い出話に、ジェイの中に残るかすかな記憶が甦る。いつも一緒にいたリリー。いつも、勉強を抜け出してはジェイの手伝いをジャマしに来たリリー。



「とくに少年のほうがりりー姫を迎えに行っていたな」

…なに？

「りりー姫は王族の一員という自覚を否が応にも持たされていたが、少年のほうは自分と姫の立場の違いを理解するにはまだ幼かったから、よく家庭教師の目を盗んでりりー姫を連れ出していたよ」

そんなはずは。

「困ったのは私でね。子どもたちはいちばん年の若い私を“お兄さん”と呼んで慕ってくれた。しかし私の元に逃げ込まれると弱った」

「なぜです？」

ヨウが合いの手を入れる。

「使用人は皆、誰もが子どもたちの味方だった。2人が隠してと言えば喜んで匿う。しかし、姫の家庭教師の女史に行方を尋ねられてしらを切るなど、若造の私には難しかったんだ」

「なるほど」

「正直に行方を伝えれば、隠しておあげよと責められ、言われるがままに匿えば、勉強のジャマをするなど叱られる。いや参ったね」

それは、自分の記憶ではなかったのか。

「2人とも宮殿の外に出る機会はほとんどなく、大人に囲まれていた。リリー姫は自分が特別な存在であることを知っていたから、大人の前では泣き顔を見せなかった。それでも子どもらしくいられたのは、少年がいたからだ。……少年の存在に救われていたと思うよ」

俺に？ リリーが？

「そしてそれは少年にとっても同じだった」

……！

「普通の子どものような暮らしができていなかったのは同じだからね、彼もまた、姫と一緒にいるときだけ子どもらしくいられたんだ」

そう、だったのだろうか。戸惑う目でフレッドを見れば、優しく頷かれる。

「ともかく子どもたちは宮殿中の人々に心から愛されていた。あの頃、皆2人の無邪気な笑顔に支えられていたんだよ。国内の不穏な空気は宮殿内にも陰を落としていたから……子どもたちもあるいは不安定な空気を感じ取っていたかもしれないが。2人一緒にいさえすればいつも笑顔だった」

いつも笑顔だった……？ 一緒にいさえすれば？ 自分の中に残る記憶との違いに、戸惑いを抑えられない。そんなジエイを置いて、ジエイ以外の皆は和やかに話を続けていく。

「今日は本当にありがとうございました」

「私のほうこそ、懐かしい話ができて嬉しかったよ」

そう言つてフレッドは一人ずつと握手をする。ジェイの手を握ったとき、

「ああ、そうだ。以前住んでいた宿舎が今は学生寮になっていると聞いたんだが。中を見ることはできるだろうか」

「それならジェイが寮住まいですよ」

フレッドと2人きりになれる口実を作ってくれた。

＝ ＝ ＝ ＝

フレッドと2人、寮までの道を歩く。会話がぽつりぽつりと生まれては途切れていく。

「たしか、こちらにキンモクセイの木立があつたね」

「はい。その道を折れれば」

「私が初めて剪定を任された木だ」

自然とそちらに足を向ける。もとより寮が見たいと言つたのもジェ

イと2人になるためだ。行き先はどこでもいい。

「ご両親はお元気だろうか」

「ええ。今度会いにいらしてください。兄さんの活躍を知ったらきっと喜びます」

「嬉しいな。ぜひお会いしたい」

そしてまた訪れる沈黙に、キンモクセイの甘い香りが漂う。

「さっきは納得のいかないような顔をしていたね」

「……！」

「ジェイは、リリー姫のことをあまり覚えていないかな」

「もちろん覚えています。ただ…僕が思っていたのとは少し、違っていて」

「ほう？」

「僕はいつも、勉強を抜け出して僕のジャマをしに来るリリーを、迷惑に思っていたんです」

「……」

「いなくなっただけから、いつまでも僕の中で存在を主張する。もう

解放してほしいと、そう思っていたんです…」

だから、一緒にいさえすればいつも笑顔だったなんてあるはずがなくて。

「……ジェイ」

呼ぶ声に、うつろな顔を上げる。

「あのときは、きみだってまだ小さな子どもだった。認めていいんだよ」

「何をです…？」

「自分が傷ついたということを」

「……！」

「大好きだったリリーの思い出を、そんなふうに歪めてしまっただけにね」

「そんな…ことは」

あるはずが。

キンモクセイから漂う甘い香りがジェイを包んだ。

この香りをかぐと、いつも彼女を思い出す。

『ジエー、ジエー!』

その声が甦る。

『ジエー待つて』

『はやくはやく、ここに隠れてたら見つからないよ』

『この場所は2人だけのひみつだもんね』

『フレッド兄さんにだってないしょだよ』

『やくそく!』

約束の場所は、キンモクセイの木の陰。

『リリーが五歳になったらもういっしょに遊べないって、なんで?』

『だってわたしお姫さまだもん。お勉強しなくちゃ』

『ぼくもいっしょにする!』

『ジエーはダメだって、お母さまが言うんだもん』

『なんで?』

『だってジエーはお姫さまじゃないもん』

『なんで!』

『わたしだってお誕生日がうれしくないのはいやだ!』

2人で写した写真は、リリーの五歳の誕生日。大人がどんなになだめすかしても、笑うことができなかった。

『リリー、迎えにきたよ』

『ジエー!』

勉強中のリリーを迎えに行くと、いつも待ち焦がれた満面の笑みで迎えてくれた。

『ジエー、これ持ってて』

リリー、泣かないで。

『わたしの顔、変えちゃうの。名前も、変えちゃうの』

リリー、行かないで。

『ジエーは覚えていてね』

待って!

手も振れなかった。名前も呼べなかった。イヤだよ、って言えなかった。

リリーがいないのが、寂しくて寂しくて寂しくて。寂しいのがつらくて、蓋をしたのだ。

リリーなんていなくていいもんね。だってワガママだったし。僕が父さんの手伝いをするのをいつもジヤマしてたしさ。だからいなくなつてよかったもんね。やくそくしちゃったから顔は覚えておくけどさ。写真も取っておくけどさ。いらないもん。リリーなんて。

そうだ。そうだった。

呆然と立ち尽くすジェイの背中を、フレッドが優しく叩く。

「兄さん」

「思い出したかい」

「僕は……」

「あのとき何があったか、姫が今どこでどうしているか。何もわからないが」

彼女のことを覚えていてあげたいんだ　そう言い残し、フレッドは帰って行った。

一人になり、ジェイは携帯電話を取り出す。リリー、今どこにいる？　言わなければ。リリーに伝えなければ。ユリに戻ってしまう前に。

焦りからうまくボタンを押せない。そんなジェイの耳に、求めている



た声が聞こえてきた。

「ジェー……」

「リリー！　そこにいたのか」

キンモクセイの木陰から姿を見せたリリーに駆け寄る。

「今の…お兄さんでしょう？　お顔だけでも見れてよかった」

「話は、聞いた？」

「少し、聞こえた…」

寂しげに視線を落とすリリーの肩をつかむ。

「リリー、ごめん。今までごめん。俺思いついたよ。リリーがいなのが寂しくて、ずっとしまいでいたんだ」

「ジェー」

「本当は会いたかった。ずっと一緒にいたかった」

「ジェー！」

リリーの目から涙が落ちる。それを見た瞬間、ジェイはリリーを胸に抱き込んでいた。

リリーのくぐもった声が、ジェイの胸元で響く。

「ジェー…私、お父さまとお母さまと一緒に国へ帰るわ」

肩を抱く手に力がこもる。

「それで、ユリになって戻ってくる」

「リリー…」

「お父さまと話して決めたの。旅券のいらない陸路に行くには時間がかかるから、さっそく今夜発つわ。それでね、その前に学校の中をいろいろ見て回ってた。リリーの目で、見ておきたくて」

体を離し、目を覗き込む。

「ユリが戻ってきたら、リリーは…？」

「また消えるわ。昨日からのことも、記憶から消してもらっつ。国へ帰るのはそのためよ」

たまらず再び抱きしめる。

「いいの。だってこの世界はユリのものだし」

「リリー、俺…ユリが好きだ。だからユリがいなくなるのは困る。けどリリーはそういうんじゃないって…もっと家族みたいに大事で…」

「悩むことないわ、ジェー。あなたもユリを選んだのだもの」

「俺が解放しろと言ったからか？ そのことならもう」

「ううん、そうじゃなくて。最初に私を見たときユリって呼んだでしょう。全然違う格好だったのに」

「……！」

「姿が変わっても気づいてくれるって約束、あなたはユリに果たしたんだわ」

…たしかにあのとき、すぐにユリと気づいた。ユリがリリーだったことにはまったく気がつかなかったのに。

「いいの。私、納得してるのよ。お父さまも言ってたでしょう？ この国の平和のためだもの」

だけどリリー、やっと会えたのに。

「それにね、ユリに嫉妬しながら生きてくよりも、嫉妬されるほうがいいじゃない？」

「何言ってるんだよ……」

わかってる。他に選択肢はないって。だから抱きしめずにいられない。

「ジエー、私とユリね、もうひとつ共通点あったわ。ユリは隠して

おきたがるだろうけど、バラしちゃう」

「なに…?」

ジェイの背に回したリリーの手が、ギュッとシャツを握る。

「ほんとはずっと、ジェーと一緒にいたい」

最後は涙声。

「リリー…俺今度こそ忘れないよ」

「ううん、忘れて。いない誰かを想う人を見ているのは、きっとユリが辛いから。今まで覚えていてくれてありがとう」

見送らなくていいから、ここでさよなら。そう言っただけで歩き出す彼女の背中が、15年前と変わらず凜としている。自分はまた呆然と見送るだけか？

いや。

「リリー！」

ふり返った彼女に、渾身の力を込めて手を振る。かける言葉は見つからないけれど、せめて笑顔で。彼女が最後に見る“ジェー”の顔は、笑顔であってほしい。

リリーもまた、背伸びをして大きく手を振ってくれた。ジエイが見  
たかった、あの笑顔で。

「もしもしジェイ？ おお生きてたか。ここ何日か顔見ないからどうしたかと思つてさ。はあ？ 謹慎！？ お前何したの。……薬を？ そんなことがあつたのか。ユリ実家に帰つたつて聞いたけど、そのせい？ ……そう、大事なかつたんだ。よかった。へえ、実家へは親戚の用事で？ ふーん」

リリーと別れてから、ジェイは寮の自室を一步も出ていなかった。薬剤の保管が甘かつたことを反省するよう、教授に5日間の謹慎を命じられたのだ。もとより誰にも会つ気にはなれなかつたし、気持ちを落ち着かせるには部屋に閉じこもる口実は却つてありがたかつた。

ジェイの試作品の薬をユリが誤つて飲んでしまったところまでは、隠さないことにした。ユリに対してもいちばん説明がつきやすいからだ。しかし実家に戻つた理由を友人たちに説明するときは、事を荒立てないよう「親戚の用事」としておいてほしい、と、ユリの両親は教授に言い残していった。

「それで？ いつ出てくんの。そう。頼むよ、毎日ロブと2人つきりだぜ？ ……うん…ああ…うん、じゃあ明日な。おやすみ」

〓 〓 〓 〓 〓

翌日。ジェイはほぼ一週間ぶりにたまり場へ足を向けた。

「おー！ 生きてたか」

「殺すなよ。ヨウ、昨日電話サンキュ」

ロブに苦笑を返し、ヨウに挨拶をする。カバンを下ろし、座ろつとすると、ロブがそれを引き止めた。

「なあ、どうこれ。ヨウも見てよ」

指差すパソコン画面を後ろから覗き込み、息を飲んだ。

「国王7割、王妃3割で作り返した。リリー姫八タチの想像図」

どれ、とヨウもジェイの隣りで画面を覗く。そして首をかしげた。

「これ、こないだジェイといた幼なじみって子に……」

似てるな。しかしそこまでは言えなかった。ジェイの悲痛な表情に気づいてしまったから。

「ロブ、俺…この写真もらっていいか？」

「へえ？ もちろん構わないけど。ジェイほんとにリリーのファンなのな。ユリが妬くぜ？ うぐ」

まったくロブのやつ、口も行動も余計なことをする。やっと気持ちの整理がついたところなのに。無言でヘッドロックをかけていると、ジェイの耳に懐かしい声が飛び込んできた。

「いま私のこと話してた？」

「ユリ！ 助ける！」

「よお、おかえり」

ひらひらと手を振ってロブをあしらひ、ヨウにただいまと返すと、ユリはジェイに向き合った。

「ジェイ、なんかごめんね。私のせいでいろいろ心配…かけ、て…」

ロブがはやす口笛が聞こえる。ヨウの呆れたようなため息が聞こえる。

ジェイはユリを抱きしめていた。



「ごめん……」

「え、大げさだよ。私がいけなかつたんだし」

ね、大丈夫だから、と諭すもジェイはただ首をふるばかりで腕を離してくれない。照れを隠すように、ユリは早口でまくしたてた。

「びつくりしちゃった。目え覚めたら実家にいるんだもん。自分の足で帰ったらいいんだけどさ、2、3日記憶がないんだよね」

「なに、体は大丈夫なの？」

ジェイの肩に手を置き、そっと引き剥がしながらヨウが問う。

「うん、ちょっと熱が出ただけ。親にも言われたんだ。学校戻ったらしちゃんとジェイに謝りなさいって。…ジェイ、ちょっとやせた…？」

「こいつも今日謹慎が解けて出てきたばかりなんだよ」

「謹慎！？ やだ、私のせいで？」

「いいじゃん、痛み分け痛み分け。それよりジェイよー、お前どっちが本命なのさ。いてっ」

余計なことを言うなとヨウがロボの頭をはたく。しかし目ではジェイに、さっさと決めろと促す。

「ユリ、本当にごめん。帰って来てくれてよかった…会いたかった」

「な、どしたの、ジエイ？」

「ユリ、好きだ。…もう俺から離れないでよ」

え、だってこんな、みんないる前でそんな、

真っ赤な顔で慌てるユリに、ヨウとロブがニヤリと返す。

「いいじゃん、どうせ俺たち知ってたから」

「そうそう、俺なんかもずっとムズムズしてたんだぜ？」

野次馬を困ったように見やる。そりゃあずっとジエイが好きだったけど、突然すぎて。薬のことの罪悪感とかじゃないよね。違うよね。

しかしジエイを振り向くと、そのまなざしは真剣そのもので。ユリの胸がじんわり熱くなった。

「いていいなら…隣りにいていいなら、ずっとジエイと一緒にいたい」

ずっと一緒にいたい。

ほんとだな、リリーの言ってた通りだ。

大丈夫。一緒にいよう。ずっと。

そんな思いをこめて再び抱きしめようとしたジェイの手は、しかし  
あとは帰ってからにしろ、とヨウに止められてしまったのだった。

## 終章

「そうだジェイ、会誌用の原稿を印刷に回したいんだけど」

「ああ、忘れてた。ユリが監修してくれたんだっけ」

数日後、たまり場でヨウに声をかけられ、15年前の王の失踪について原稿が書きかけだったのを思い出す。それを読んだユリに、  
「ジェイは王様の味方なんだね」と言われたあの原稿。

「監修ってほどじゃ……けど、うん、シロウトでもわかりやすかったよ。あ、でも書きかけのときに読んだのかな、最後のところ初めて読む」

ヨウの手にあるプリントされた原稿を覗きながら、ユリが首をひねる。

「そこがすげえいいんだよ。大胆だけど面白い」

ヨウの絶賛に、今度はジェイが首をひねった。プリントを受け取り、ざっと目を通す。

『この国には15年前まで王がいた。国民は王室を慕っており、若い国王夫妻と一人娘の一家は国民に愛されていた』

そう、当たり障りのないことしか書いていないはずだ。

『王の失踪には何か意図があったのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思っている者もいる。真実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか』

そうそう、最後に私見を加えていて

！

プリントをめくる手が止まり、目を見張る。原稿の最後は、書いた覚えのない文章。

書いたのはきつと、

…りりー。

〓 〓 〓 〓 〓

この国には15年前まで王がいた。

国民は王室を慕っており、若い国王夫妻と一人娘の一家は国民に愛

されていた。

王の失踪には何か意図があったのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思っている者もいる。真実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか。

いや、血が一滴も流れていなくとも、傷ついた者は多いだろう。人生を狂わされた者もいるはずだ。それでもなお、あのときの王の決断を私は誇りに思う。

当時幼かった姫に同情を寄せる声も聞く。しかしそれは正しくない。姫の失踪は、彼女に初めて与えられた、そして最後の、王族としての仕事だったのだから。

王位継承者として生まれ、その責務を負うことと引き換えに与えられた、恵まれた生活。ひとつも責任を果たさぬまま、ただ返上することはできない。帝王教育を始めた矢先のこと、幼いながらも彼女は自分の果たすべき役割を理解していた。

だからこの先の将来、リリー姫が姿を現すことは絶対でない。自らの存在を抹消することこそが、この国の姫として生を受けた彼女の、存在意義そのものなのだから。

|| || || || ||

「最後の『』に感謝する』っていつのは？」

「…ジエイ？」

呼ばれてハッと我に返る。

「あ…ああ、ジョンソン教授だよ」

「なんだ俺じゃないのか」

「なんでロブ？」

「俺、ミドルネーム“ジャック”だぜ？」

「それ言ったら俺の“ヨウ”も母国語ではスペル」なんだけど」

ユリが吹き出す。

「なに、全員」なの？」

ジエイもまた、笑って返す。

「じゃあいいよ、お前ら全員ってことで」

あながち間違っていないよな、リリー。そうだろ？

リリー。きみいつの間にこれを書いたんだ？

けど、そうだな。ただ大人しく消えて行くなんてきみらしくない。

やっぱり忘れられないな。きみを忘れないよ、リリー。心配することないさ、ユリのことは大切にする。きみがヤキモチを焼くくらいにね。

く完く



## 終章（後書き）

じつは書き始めたのは1年近く前でした。途中で違う作品を書き始めたらそっちがすっかり楽しくなってしまう、えらい時間がかかってしまいました（楽しくなっちゃったほうの小説『サムライ・ラヴアー』もよろしければお読みください！）。

やっぱり一人称のほうが書きやすいな、というのが書き終えての感想です。

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9775s/>

---

キンモクセイ

2011年8月12日01時15分発行